

こじ開けられたパンドラの箱

もうずいぶんと前のことだが、著名な児童文学者や学者が大学生との座談会で、「人をなぜ殺したらいけないのか」と学生に聞かれ、説得力ある根拠を示すことができなかったことが話題になったことがある。マスコミでも結構取り上げられて、本当に「殺してはいけない理由」を誰もが納得するように示すことができるのだろうか？・・・いやいや、根拠を示せなかったこと自体が情けない・・・などと結構な議論にもなっていた。

皆さんはどうだろうか。教室で子どもたちに、または家庭で自分の子どもに、正面から「人はなぜ人を殺してはいけないの」と聞かれたら、納得させるだけの答えを持っているだろうか。逆に、「人を殺したい理由」というのは、どうやらたくさんあって、個人的な恨みから・・・、借金の返済に困って・・・、などから、政治的なテロまで、幅広く多種多様だ。この「人を殺したい多種多様な理由」に対し、「人を殺してはいけない理由」というのは、そんなに幅が広く、多様であるとは思われない。そうすると、多数の「人を殺したい理由」を、少数の「人を殺してはいけない理由」が頑張っけて押しとどめているように思える。力のバランスは微妙だ。ちょっと隙を与えると、一気に破られて、「なにが悪いんだ！」などと開き直られてしまうことになる。まるで、箱のふたが開いたとたんに飛び出していった、パンドラの箱の中の悪意や不幸や絶望のように。

「人を殺してはいけない理由」というのは、それぞれの国によっても考え方が違うようだ。特に宗教が社会や人々の日常規範に大きく関わっているところは、宗教からその答えを導き出すだろう。また、民族やその国の歴史的背景によっても変わってくるのだと思う。

だから、「人を殺してもしょうがない」基準もそれぞれなのかもしれない。現在アメリカで問題になっている、警察官が犯罪が疑われる黒人を射殺してしまうという「理由」も、正当防衛を本人が主張していても、その背景に広がるものも含めて、私たちには理解できない部分が多いし、折り合いがつかないのかさえ疑わしくなる。

ではもう一度振り返って日本はどうだろうか。すべての国民の規範にまで組み込まれた共通の宗教は見当たらない。また、他民族からの侵略にさらされ続けた歴史を持つわけでもない。だから、「人には生きる権利があるから、奪ってはいけない」という理屈も正しくはあっても、身体的な共感を得るまでにはいかない。それよりも、「人を殺してはいけない」と、頭から結論を押しつけられた方が納得がいくような気もする。なぜだろうか。

それは、「人を殺してはいけない」ということが、一つの文化だからではないだろうか。根拠を持った思想というよりも、日常の挨拶のような、生活に埋め込まれた文化なのだと私は考えたい。そして、日本人はこの文化をしっかりと大切にしてきた。そして守ってきた。

いつから？そう、70年前から。殺し殺されるという、極限の痛ましい（兵士だけでなく民間人が本当にたくさん殺された・・・戦闘ではなく飢えと病気で死んでいった・・・中国ではたくさんの人を虐殺した・・・数え切れない死）歴史の果てに、私たち日本は今の文化を創ってきたのではないだろうか。70年という弱々しい文化だけど、それは私たちの願いとして生まれてきたのに違いない。

だからこの70年、私たちは子どもたちに言い続けてきた。「いいかい、人はね、何があっても人を殺しちゃいけないよ！」戦後教育の揺るぎない事実である。・・・しかし、その言葉をいつまで私たちは言い続けられるのだろうか。

国会でパンドラの箱はこじあけられた。国会前で喉をからして抗議する若者たちが、パンドラの箱に残されていたという、「希望」に違いない。

平和を、幼き子どもたちに手渡すことができないかもしれないことに、自責の念が生まれる。若者たちに、どうしようもない政治の世界を見せてしまったことに、自責の念が生まれる。

それでも、いまは、まだやれることを探すことから始めるしかないと思うのだ。

※この文の「人を殺してはいけない」を、「人は殺されてはいけない」に読み替えてみてください。やっぱり、同じです！



【お知らせ】教育講演会の講師と日程が決まりました！！

講師 平川 克美氏（実業家・文筆家・立教大学特任教授）
日時 2016年2月21日（日）午後13時～（予定）

トマ・ピケティが資本主義の帰結を予言した内容が最近話題になっていました。資本主義が極端な貧富の差を生み出し、格差は固定化されるということでした。自由な経済活動がやがては富の圧倒的な占有を生み出し、かつ、その占有は血統によって相続されるという、封建的身分制度と変わらない構造がそこには明示されていました。

今回の教育講演会は、こうした世界経済や資本主義経済の今日的な様相から、現代社会をひもときます。

キーワードは「グローバリズム」。そしてその主役は「株式会社」という組織。経済活動の画期的なシステムとして登場した「株式会社」は、利益を求めて拡大し続けなければならないという宿命を背負います。そして、そのため世界中の全ては「市場」以外の何物でもなく、彼らは競争に生き残るために合体し、巨大化したのです。「多国籍企業」に変身した彼らの行く手を阻むのは「国家」という壁。利益追求のために、国家という制約を破ろうとする様々な取り組み。世界は今、国家という枠によってではなく、巨大株式会社の意向によって動き始めている・・・という、なんとも恐ろしい話。

人は、安い労働者として使われ、消費者として吸い上げられていくのですね。でも、グローバルとはいっても、限りある世界。全てが市場となってこれ以上の拡大ができなくなったとき、株式会社はどこに生き残りをかけるのでしょうか？

そういえば、福島原発事故以降も、原発輸出のセールスを総理大臣が自ら先頭に立っていたし、武器輸出三原則を骨抜きにして、経済界がはっきりと武器輸出に飛びついている姿と安保法制は、大企業従従型国家の本質かもしれませんね。（ア～、オソロシヤ）

【理事の独り言】 連日、全国の人が反対し国会前に抗議に出かけたにも関わらず、安保法案は参院を通過してしまった。衆院で可決したときも、国会に出かけたが、「9条を守れ」というのは勿論のこと、「農民」というプラカードを持って1人でかけた人を目にした。また近県ばかりでなく遠く広島、岡山から。参院での審議中には乳児を抱いた若い母親、夜7時過ぎでも子どもを連れて集まる母親達。自分自身が理由もなく銃を向けたくないという若者。何より戦争の悲惨さを知る老人達。誰もが戦後70年の平和がどれ程大切かを知人達。それが覆されるこのとき、居てもたってもいられず駆けつけた人ばかりだ。にもかかわらず一体日本の政治とは誰のためのものなのか。政治とは国民のためにあるのではないのか。この負の遺産を未来に残しては絶対にならないと更に決意を固めねばならない。（TT）